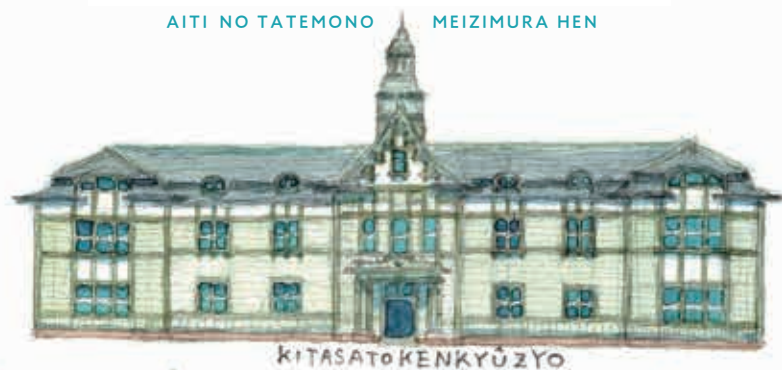




あいちのたてもの 明治村編

AITI NO TATEMONO MEIZIMURA HEN



REGISTERED
TANGIBLE
CULTURAL
PROPERTY



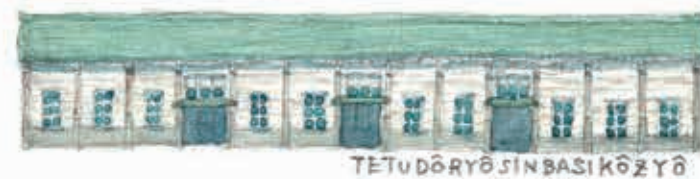
あいちのたてもの明治村編



愛知県

国登録有形文化財

建造物所有者の会



愛知登文会

あいちのたてもの 明治村編

絵と文 村瀬良太

愛知県国登録有形文化財建造物所有者の会



はじめに

私たちのまわりには、歴史を積み重ねた様々な建物がごく自然にまちに溶け込んでいます。「あいちのたてもの」シリーズは、愛知県内にあるそのような文化財として貴重な建物のうちの国登録有形文化財の魅力を紹介する冊子として、これまで「ものづくり編」「まなびや編」「いのりのば編」「すまい編」の4冊を発行してきました。

これらの冊子は文化庁の補助金をもとに年1冊を制作してきましたが、2021年度でひと区切りとなり、翌2022年度は休止せざるを得ない状況でした。ただ、ご好評をいただいている冊子を継続して発行したいという思いから、かねてより特集などで取り上げていた博物館 明治村の魅力を、この機会に改めて紹介できないかと考えました。

明治村は近代建築の保存活用を牽引してきた愛知県が誇る施設です。冊子の制作に協力いただいている建築史家の村瀬良太氏は、明治村に創設の頃から関わり続けてきた恩師の飯田喜四郎先生から、折に触れて貴重な証言を聞いており、それを何かのかたちで残したいという思いがありました。愛知登文会としても、明治村の果たした役割と魅力を紹介することは意義あることだと考え、明治村にも相談したところ、全面協力を得られることとなり、クラウドファンディングで資金を募ることとなりました。

予想を超える多くの方々からご支援をいただくとともに、公益信託大成建設自然・歴史環境基金の助成金も受けることができ、当初予定よりもボリュームアップした冊子を制作することができました。ご協力いただいた皆さまに、改めて感謝申し上げます。

この冊子が明治村の魅力を改めて知るきっかけとなり、また歴史的建造物の保存活用について考える一助になることを願っています。ぜひ、この冊子を片手に明治村散策をお楽しみください。

愛知県国登録有形文化財建造物所有者の会
会長 小栗 宏次

もくじ

はじめに	2
特別インタビュー 飯田喜四郎先生	4
「明治村ができたとき」	22
◆洋風建築	23
聖ヨハネ教会堂	24
西郷従道邸	26
北里研究所本館・医学館	28
神戸山手西洋人住居	30
聖ザビエル天主堂	32
内閣文庫	34
それ以外の洋風建築1 学校	36
それ以外の洋風建築2 病院	38
それ以外の洋風建築3 監獄	40
それ以外の洋風建築4 灯台	42
〈特別寄稿〉明治村を支える人々① 中野裕子さん	44
【コラム】銅板プレートと市川清作	46
◆和風建築	47
東松家住宅	48



清水医院	50
西園寺公望別邸「坐漁荘」	52
〈特別寄稿〉明治村を支える人々② 石川新太郎さん	54
呉服座	56
明治の文化を伝える 文豪の住まい	58
【明治村で昼食を】	60
【コラム】明治村タイル紀行	62
◆新しい様式	63
鉄道寮新橋工場・機械館	64
芝川又右衛門邸	66
〈特別インタビュー〉明治村を支える人々③ 魚津源二さん	68
帝国ホテル鳥瞰図	70
帝国ホテル中央玄関	72
飯田喜四郎先生 特別インタビュー2	74
「帝国ホテル中央玄関の移築と復原」	78
〈特別インタビュー〉明治村を支える人々④ 後藤泰男さん	80
広告	82
国登録有形文化財とは	82
愛知県国登録有形文化財建造物所有者の会とは	82



特別インタビュー

飯田喜四郎先生 明治村ができたとき

ここに掲載したのは、2021年9月から23年1月にかけて行った、飯田喜四郎先生の明治村に関するインタビューをまとめたものである。

飯田先生は1924年東京に生まれ、東京帝国大学航空科に入学するも、在籍時に終戦をむかえ建築学科へ転科。その後、ゴシック建築に感銘を受けてフランスへ留学し、パリの文科省建築局文化財建造物特別講座で歴史的建造物の修復と保存を学ばれた。

明治村との関わりは1962年に遡る。翌63年の名古屋大学への着任に合わせて明治村建築委員会へ招聘された。また1997年からは四代目館長に就任し、2010年まで重責を果たされた。足掛け60年以上に渡り明治村を支え続けた創設期のメンバーである。

インタビューは、日当たりの良い飯田先生の自宅のリビングで行われた。当時のことを思い出すようにゆっくりと語られた話から、明治村の果たしてきた役割や、建物を残すことの意味を感じていただければと思う。

(聞き手と文責：村瀬良太)



photo: Sayaka Ito

博物館 明治村とは

―昭和40年に開村してから60年近くが経ち、博物館 明治村(以下「明治村」)は多くの人々に親しまれる施設となっています。そこで改めて、創設から関わられてきた先生に、そもそも明治村とはどのような施設として構想されたのか伺いたいと思います。

端的にいいますと、明治時代の典型的な建物をもつてつくった施設となります。典型的とは、明治になって新しく入ってきた建物、例えば洋館や学校、病院や役場、教会、監獄などといった建物から、灯台や鉄道などのインフラの一端を担った建造物をいいます。

それらを展示するための場所をつくって移築することが目的であり、私が関わり始めた時には、その方向性は決まっていた。

―先生から見た明治の建築とはどんな印象だったのでしょうか？

を移築して展示することに不安はありましたか？また、一般の人々には何を感じてもらいたかったのでしょうか？

開村前は、お客さんが来なかったらどうしようとは思いました。ただ、とにかく良い建築を見てもらいたかった。名鉄^{〔※注①〕}がお金を出してくれていたので、私たちもいい加減なものではできなかったです。一般の人々に建築の良さを伝えるのは難しいので、建物の「顔」となる部分は見られるようにしたいと思っていました。

―「顔」というのはファサード^{〔※注②〕}だけではなく、見どころ、という理解でよろしいですか？

はい。一方で、ヨーロッパでは外観を大事にする手法が主流です。日本では材質や細部にこだわるやり方もありますが、それは私のスタンスではなかった。それと、一般の人々に何を感じてもらいたかったのかについては、まずは明治という時代に直に触れて欲しいと思いました。

―それは、明治の建物を簡単に壊してしまう

実は私にとって、明治は分からない時代でした。というのも、昭和30年代の終わり頃では明治の建物について研究も進んでおらず、いつのもののか、誰が建てたものか、設計者の名前も分からないという、あらゆる評価軸が定まっていない状況でした。

でも街中に佇む建物の凄さは感じていた。だから評価されずに壊されていく姿を見て、自分達で何かできればという強い思いもありました。

―先生は昭和28年から31年までフランスへ留学して、文化財建造物について学んでこられたが、それ以前から明治の建物に対してそのような意識はあったのですか？

いえ。フランスに行く前はあまり気にしていませんでした。ただ、明治は日本の歴史上から見ても画期となった重要な時代です。そういった歴史を伝える建物が簡単に壊される状況は、本当に情けないと思いました。

―そのような社会状況で、あえて明治の建物

ことへのアンチテーゼや、あるいは古い時代を懐かしみ温故知新を促すといった意識もありましたか？

言葉にするのは難しいですが、行き先の見えない状況に方向性をつけたかった、という感覚が近いかもしれません。

創設のころ

―先生が具体的に明治村と関わられたのは、いつ頃からだったのでしょうか？

私が明治村に関わったのは、昭和37年12月の第2回の理事会^{〔※注③〕}からになります。明治村の構想はその前に発表されましたが、建築委員会は翌38年につくられ、7月にスタートしています。私は委員だった太田博太郎^{〔※注④〕}さんと関野克^{〔※注⑤〕}さんからお声がかかった。

その当時は高度経済成長期で、古い建物を残すことは新しい社会をつくらうという気分と逆行していました。また建築界



図1…飯田先生の手帳。一番手前が昭和28年の留学時代のもので、その後ろが昭和38年の明治村建築委員会第一回のメモが残されている。

注①…名古屋鉄道株式会社

注②…建物を正面から見たときの外観のこと。

注③…創設期略年表

昭和35年 谷口吉郎と土川元夫が構想を話し合う
昭和36年10月 第一回明治村設立準備委員会

昭和37年7月 財団法人成立
8月 第一回理事会
12月 第二回理事会

昭和38年4月 地鎮祭
7月 第一回建築委員会
昭和39年11月 博物館登録認可
昭和40年3月 博物館明治村開村

注④…1991〜2007. 建築史家。東京大学名誉教授、文化財建造物保存技術協会理事長などをとめ、中世の寺院建築や民家の研究をリードした。

注⑤…1909〜2001. 建築史家。東京大学名誉教授。明治村二代目館長(1979〜1991)。

でも、丹下健三(※注⑥)さんをはじめメタボリズム(※注⑦)などの新しい活動が脚光を浴びていましたから、私たちはそんな社会の気分から反感を買わないように意識せざるを得なかった。

その一方で、私はこの事業は成功するだろうと思っていた。

―その理由はなんですか？時代の先を見越していたのでしょうか？

いいえ、ただの勘です(笑)

―それはすごい、大当たりでしたね。ところで、明治村の構想は建築家の谷口吉郎(※注⑧)さんと名鉄の土川元夫(※注⑨)さんが主になって始められましたよね？

谷口さんは昭和15年に、解体される鹿鳴館(※注⑩)を電車の窓から見て、日本の文明開化の起点ともいえる重要な建物が簡単に壊されてしまうことをうれい、明治という時代の博物館にすべきだったと東京日日新聞(※注⑪)に投稿しました。太平洋戦争のさなかの憲兵がいくらでもいる怖い

時代に、体制への反対意見を出した。逮捕も覚悟していたと思います。

―信念のある方だったのですね。谷口さんは、文章も上手で穏やかな人柄だとばかり思っていました。

それはもう、腹の据わった方でした。それで、戦後になって同じことが起こった。あちこちで明治の建物がどんどん壊されていったので、谷口さんはなんとかこれを食い止めたいと思い、当時名鉄の副社長だった土川さんに相談します。

土川さんと谷口さんは金沢の四高(※注⑫)の同窓生で、谷口さんは名鉄の仕事を引き受けていた縁もあった。それで、土川さんが名鉄の幹部会に諮ったのですが、最初は誰も賛同しなかった。赤字になるのは目に見えていましたから。

それでも土川さんは剛腕(※注⑬)な人で、繰り返し説得してなんとかOKをもらって、谷口さんが建築委員会を起し、博物館をつくらうということでスタートしたわけです。

注⑥・1913～2005。建築家・都市計画家。第一次世界大戦復興後から高度経済成長期にかけて、多くの国家プロジェクトを手がけた。

注⑦・日本の若手建築家・都市計画家グループが開始した建築運動。「新陳代謝」を意味する生物用語からグループの名をとり、社会の変化や人口の成長に合わせて有機的に成長する都市や建築を提案した。

注⑧・1904～1979。建築家。東京工業大学名誉教授。明治村初代館長(1965-1979)。文化財保護に尽力し、多数の著書を残した。

注⑨・1903～1974。実業家。名古屋鉄道社長など歴任。名鉄を一地方の鉄道会社から、多角的・全国的な事業展開を行う複合企業体へと変貌させ「名鉄中興の祖」とも呼ばれている。

注⑩・明治16年に井上馨の提唱で建設された国費や外交官を接待するための迎賓館。設計はイギリスの建築家ジョサイア・コンドル。



明治村建築委員会のこと

―建築委員会のメンバーは、谷口さん、太田さん、関野さん以外にどなたがいらっしゃいましたか？

太田さんと関野さんは日本建築史の方で、それに東工大の藤岡通夫(※注⑭)さん、国鉄の菊池重郎(※注⑮)さん、伝統建築の修復の専門家として市川清作(※注⑯)さん、地元から名工大の城戸久(※注⑰)さんと名城大の伊藤三千雄(※注⑱)さん、そして私が参加しています(※注⑲)。移築と復原に関し



ては、谷口さん、太田さん、関野さん、市川さん、伊藤さん、私の6人が中心になって担当しました。

―そうそうたるメンバーですね。和風建築出身の方が多く中で、先生はどのような役回りでお声がかかったのでしょうか？

それはフランスで学んだ西洋建築の保存や修復、復原のノウハウが求められたのだと思います。

実は谷口さんは、私が宮内庁に勤めていた頃に東宮御所(※注⑳)の設計で打ち合わせに来ていて、よくお見かけしていました。大先輩ですから、こちらからお話することとはなかったですが、ただ向こうも私を知っていて、名古屋大学へ赴任するのを機に明治村へ来てほしいと伝えられました。―建築委員会ではどのようなことが話し合われたのですか？

建築委員会の会議は月に1回か2回程度集まりました。場所は一定ではなく、東京だったり名古屋だったりしましたが、明

注⑪・現毎日新聞

注⑫・現金沢大学

注⑬・1908～1988。建築史家。東京工業大学名誉教授。東南アジア諸国の王宮や日本の城郭などの研究に携わった。

注⑭・東京工業大学建築学科卒。国鉄技術研究所建築研究室長を経て、博物館明治村の設立に参与。

注⑮・大工出身の技術者。金剛證寺や瀧山寺、松本城など伝統的建造物の修理に数多く携わった。

注⑯・1908～1979。建築史家。名古屋工業大学名誉教授。日本建築史の専門家として、多くの城の再建に携わった。

注⑰・1934～2013。建築史家。名城大学名誉教授。明治村では建築委員会の意向を職員・業者に伝える重要な役割を果たした。

注⑱・初期の建築委員会には他に建築史家の内藤昌や名鉄の斎藤八郎の名も確認できる。

注⑲・次期天皇・皇太子の住まい。皇太子明仁親王・平成時代の天皇が皇太子だったときの住まいとして1960年4月に竣工した。

治村への移築工事が始まってからは名古屋の場合が多かった。時間は1〜3時間程度で、建物の選定など重要な決定が必要なとき以外は、先にあげた6人で集まることが多かったです。

委員会の人々が共通して思っていたのは、とにかく残すこと。そして復原した建物を見せるのを重視しよう、ということでした。テーマパークのようにすることは考えていないし、そんな余裕ありませんでした。

―移築や保存の要望は建築委員会へ来たのでしょうか？

明治村の構想が発表されて以降、「なんとか残してほしい」という連絡が100件以上もありました。事務所を構えていたわけではなかったので、手紙や電話で各委員などへの問い合わせが多かったです。関西方面の民間からも多かったように記憶しています。また市町村からの連絡もたくさん来た。

に調査ができなかった。一日か二日しかない場合がほとんどでした。

―事前の調査が一日か二日しかできなかったというのは衝撃ですね。建物ごとに事情は違うのでしょうか、解体までの期間がいかに差し迫っていたかが伝わります。100件以上の問い合わせがある中で、選定する基準はあったのですか？

基本的には明治期の建物が重視され、その上で建築的な価値で判断されるのですが、まだ研究が進んでいない状況でもありました。また、西郷従道(※図4)や夏目漱石(※図5)などの政治や文化に関わった重要な人物の建物も重視されました。これは最初の委員会の時から共通して意識していました。

それ以外に、個人の好みや外部からの意向なども影響しています。建築委員会以外にも多くの人々が関わっていましたから。ただ谷口さんの意向はやはり強かったです。選定以外でも決定的な場面では発言されました。

それらの建築は、地元では有名だけど全国的には無名のものばかりでした。公共建築でいえば三重県庁舎(※図2)などがそうです。また興津の坐漁荘(※図3)は、市側が引き取りを拒否したので市民団体や企業が連絡してきました。

―昭和30年代から逆算すると明治時代の建物の多くが、その時すでに50年以上経って老朽化してきていましたよね？

はい。そのころは、新しく建物を建て替えることに反対する人などほとんどいなかった。むしろ鉄筋コンクリート造の立派で頑丈なものに建て替えたい人が大勢でした。その一方で、建物は雨漏りさえなければ簡単には壊れない。だから、地元で思い入れのある人々から、引き取ってもらえないかとなるわけです。

そもそも明治村は、基本的に受け身です。引き取って欲しいと連絡のあった建物を調査して、委員会に諮り判断します。ただ、どの建物も取り壊しが迫っていて満足

移築と復原について

―限られた時間内での調査を経て、移築に向けた解体と復原の作業も慌ただしく進んだのだと思いますが、そのあたりのお話を聞かせて下さい。

実際のところ、解体と復原作業は大変難しかった(笑)なぜなら解体する側も復原する側も、経験のある人がほとんどいないのですから。

特に解体に関しては、壊す側は急いで壊すのでバラバラのままくる場合も多かったです。残骸のような部材を前にして、委員会のメンバーたちと途方に暮れたこともありました。

私たち委員は、そんな壊れたものから建物をつくり直すことになります。足りない部材を足して復原のために設計しなくてはならないので、壊れ方が悪いほど元の姿がわからず苦労しました。

―移築や復原に際しての委員会での体制はど



図2…三重県庁舎



図3…西園寺公望別邸 坐漁荘



図4…西郷従道邸



図5…森鷗外・夏目漱石住宅

うだったのですか？

各建物についてほしい一人もしくは数人が担当につき、サポートにもう一人つく感じでした。その中で、名古屋にいて頻繁に明治村に通えた私と伊藤さんがサポートにつく場合が多かったです。移築工事が本格化する昭和39年から41年くらいまでは、私と伊藤さんは週に3日くらい通っていました。

また、委員会の中では発言にあまり優劣はありませんでしたから、自由に意見を出し合いました。ですから、自然と出席した人の意見が通ることになります。

―先生は東松家住宅(※図6)にも関わられたと伺ったのですが、そちらはどのような形だったのでしょうか？

実は、あの建物は私は担当ではなかったのですが、色々な事情があって関わることになりました(笑)東松家住宅は解体の話聞いて、こちら側から残して欲しいとお願いに行った珍しい例です。

復原の要となるもの

―それで、いよいよ復原となるのですが、先生が復原に際して重視されたポイントはどこだったのでしょうか？

まず委員会で重視したのが、古い部分を大事に残す、というルールでした。その上で、私が重視したのは見栄えです。とにかく外観も内装も近いものにすることを考えました。これはフランスで学んだ影響もありますが、それ以上に工期やコストのことが大きかった。適切な指示がなされないまま送られてきた部材では、構造や材料などを元の姿に再現することが難しかったのです。むしろほとんど新築するような作業となり、時間もお金もかかりました。

でも本当は、きちんと調査して丁寧に解体し復原して残すとなると、お金も時間ももつとかかります。

―フランスの文化財保存の学校では工事予算

ただ持ち主が残すつもりがなくて、何度か伺ってようやくOKとなった。交渉には城戸さんが当たったと聞いています。こちらの建物も傷みが激しくて、特に3階の奥の座敷は使用されていなかったこともあり状態が良くなかった。同じように、表側の2、3階の部屋も元の姿とは違います。外観は復原できたのですが。

―ゴシック建築が専門の先生が和風住宅にも関わられていたのは興味深いですね。ちなみに解体や移築、復原の費用はどこが出したのですか？

解体費は所有者や地元の団体が、復原費は明治村がもつことが多く、輸送費はケースバイケースでした。

ただ、開村から3年目に帝国ホテル(※図7)の話が来て、そちらへ人員と労力と費用を割いたため、その間に壊されてしまった建物も少なくありませんでした。

など経理についても教えられるのですか？

私が在籍した講座では修復を担当する学科があつて、難しい試験もあった。それに合格すると「文化財の建築家」(※注②)という特別な存在となって、県や市町村の長とつながり、新築や修復も含めて街並みを守るための相談役となることができました。私は留学中に文化財の建築家の事務所で働き、実務や経理はそこで学びました(※図8)。

日本ではまだそういった建築家は少ないですが、これから必要になってくると思いますし、私はこれが本当の建築家の姿だと思っています。

―先生は、旧東京帝国大学の航空科から建築科に移られたのですよね。

そもそもゴシック建築に感銘を受けて保存に行こうと決めたのですが、当時そういった文化財が重要であることをはっきりいえたのはフランスだけでした。ですから、日本からわざわざフランスに学びに来た



図6：東松家住宅



図7：帝国ホテル中央玄関



注②：文化財保護事業部主任建築家



図8：飯田先生留学時代の写真(右隣が飯田先生でその隣が恩師のフロアド・ヴォー先生と修復中の教会堂の写真)

ことに大変敬意を払われましてね。留学生ですから試験に受かっても文化財の建築家にはなれないのですが、とても大事に扱ってくれた。そういうことを含めて、文化を守ることで学ぶことの大切さを感じて、文を感じました。

ーでは歴史ある建築を残すという信念も、そこに起因するのでしょうか？

フランスでは文化財保存の原動力は民衆です。そこに火をつけるのは文化財の建築家の役割です。歴史ある建築は、過去の時代のその時にしかないものです。ですからそれは、どうしても残さないとけない。

フランスでは一般の人々にもそれが浸透していて、文化財をもつのは彼らの権利だと考えています。そのため、お金の確保も民衆から自然に集まってくる。また文化財を大切にしている研究者を育てる重要性についても、よく理解されていました。そういった関係性を肌で感じて、これは素晴らしいことだと確信しました。

ーとても重要なお話ですね。単に文化財を残すのではなく、それを支える人にも敬意を払う。日本はまだまだ遅れている部分だと思います。

移築と復元の現場

復元に際しては外観と見栄えが大事なポイントになりますが、各々の建物によってつなぐ方法やディテールが違いため、詳細についてはそれぞれの建物に関わった人しかわからない部分が多いです。

一方で、解体の指示も担当者に委ねられます。また、解体した大工が復元を担当するという原則もありましたが、実際には難しかった。私が担当した聖ヨハネ教会堂や聖ザビエル天主堂は、解体の指示をした上で移築することができたのと、復元の設計方針を委員会で諮ったときもすんなりOKが出たため、あまり苦労しませんでした。その辺りはフランスでの経験が生きたと思います。また谷口さんのように、実際

に建物を設計してきた建築家も適切な指示が出せたと思います。

それができなかった場合は、新しく作り直すことになります。

ーその後の流れについてもお聞かせいただけますか？

先ほども触れましたが、復元に明確な形式はなく、それぞれの建物で状態が違いましたから、とにかくやれる範囲から修復に向き合っていました。

まず使える部材とダメな部材を分け、材を整えてから足りないものを足して復元していきます。そして分からない部分は担当委員が決めていく流れとなる。そもそも図面も写真もない状況で始まるので、調査の時に担当者や職員が現地写真を撮り、スケッチをして図面に起こしていきます。

ところで解体された部材は、可能な限り大きな塊で運びました。実際には使えなくても調査して復元に役立てることが

できたからです。

その後は担当委員の指示のもとで職員が動き、施工は建設会社が作業にあたります。

残念だったのは、残った部材の中には廃棄処分したものもありました。帝国ホテルの柱や梁のような非常に重要な部材でも一部は廃棄したものがあって、その時とはとても心苦しかったです。

ー帝国ホテルの柱のひとつは、常滑のINAXライブミュージアム内の建築陶器のはじまり館で展示されていますよね。貸与には先生の口添えがあったとうかがっています(※図9)。

創建時に戻された聖ヨハネ教会堂

ー先生が移築と復元に関われた聖ヨハネ教会堂について、お話しいただけますか？

聖ヨハネ教会堂は元は京都の河原町にあった建物ですが、実は私は見に行っていないんです(笑)



図9：帝国ホテル日本館の柱

「移築報告書によると、京大の村田治郎（※注⑭）さんから移築保存の要請があり、大阪学芸大学の近藤豊（※注⑮）さんが実測調査と解体工事に関わられたとありました。



聖ヨハネ教会堂

近藤豊さんのことはよく覚えています。彼はそれまでに擬洋風建築(※注②)の素晴らしい著作を発表していました。私は復原を担当したのですが、解体工事中に

定礎石の中から設計図や竣工当時の写真聖書などが発見されて、当初の姿に戻すことを委員会に諮ったという経緯があります。

具体的にいうと、外観正面のトレーサリー（※注²⁴）が改築されて3連のものだった（※図10）のを4連に戻し、時間はかかりましたが、ステンドグラスも平成11年に復原しました（※図11）。

ーステンドグラスの復原ですか。どうやるのでしょうか？

そもそもこの教会堂は、窓やステンドグラスの多くが台風被害でほとんど壊れてしまつて、違う形で修復されていました。そのため、かたちについては発見された当初の図面から復原し、色に関しては、無事だったガラスを集めて昔の姿の残された窓が、2力所あつたので、それを参考に復原してあります。

普通、ステンドグラスは戻せないんですよ。カラー写真が撮れるようになったのは

戦後になりますから。その点では残されたものがあって幸運でした。

それと、この建物はステンドグラスが空間の要になると思っていたので、最初からステンドグラスの職人に入ってもらいました。

―なるほど。限られた期間の中でも調査や工事を進めながら色々な発見があつて、復原につながつていくですね。他に留意された点はありませんか？

聖ヨハネ教会堂の見どころはやはり外観です。これほど華やかなものはない。ロマネスク様式(※注²⁵)と紹介されていますが、正確には中世ロマネスク建築というよりも、むしろ19世紀のアメリカで流行したロマネスク・リバイバル(※注²⁶)に近い。

設計者のガーディナー(※注⑧)は、デザインが上手かったのでしょう。ただその分装飾が多くて、傷みも激しかった。ステンドグラスが要になっていると思ったのも、やはり外観からの判断です。4連のトレーサリー

注② 1895～1985、建築史家
京都大学名誉教授。

注③ 建築史家、大阪学芸大学勤務、著
書に「明治初期の擬洋風建築の研究」。

注④ 明治初期に大工が西洋の建築に
似せて建てた建築物。

注⑤ シック建築に見られる窓枠の
装飾のこと。



図10 移築前のトレーサリー

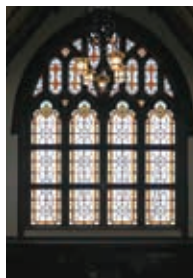


図11-4 連に戻されたトレーサリーと復原されたステンドグラス

注②⑤：古代ローマ文化の影響を受けた建築様式。

注②⑥…11世紀から12世紀のロマネスク建築に着想を得た建築様式。

注②③
p
24
25
参照

注②⑧…12世紀後半から花開いたフランスを発祥とする建築様式。

—聖ザビエル天主堂についても話したいだけ
ますか？特に、先生はゴシック建築※注(28)のこ
専門でいらつしやいますから、研究者からの視
点も伺いたいと思います。

構造形式を変更した聖ザビエル天主堂



聖ザビエル天主堂

ただ細部は良く出来ていて、例えば身廊（みいろ）で立ち上がるピア（柱）は、束ねられた柱型が柱頭で収束し、上方のリブ・ヴォールトへつながっていて上手い。また側廊（そくろう）の交差ヴォールトともきちんとながっています。

確かに外観は、全体が白塗りで石積みのような筋彫りがあつて、むしろイタリアのロマネスク建築を感じさせます。明治村に来る以前はどんな様子だったのでしょうか？

―状態の良い建物の移築と復原に際して気を
つけた部分はどこになりますか？

また壁の外側にはレンガ壁のバットレス
(控壁)がついているのですが、こちらは側
廊の屋根の梁の上に乗っかるという、とん
でもないことをしていた。本来のゴシック
建築ではバットレスは構造的な補強なの
ですが、こちらは飾りなのです。

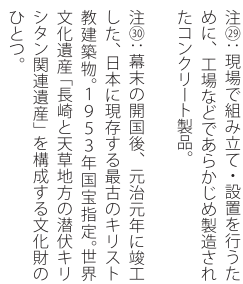
ーそれはうかがわないと分からない部分ですね。

外側からでは見えませんから。そういった部材

ザビエルは建物の状態が良く、柱や柱の上に乗る桁などの木造の部材も当時ものを再利用できたので、逆に苦勞しました。ただ外壁など必要なところは鉄筋コンクリートへ変えています。実際のところ、現在の法規の範囲ではレンガで壁面を復原するのは難しい。ですから、それよりも、きちんと建てることを第一に考えました。

はい。とにかく外の形だけはそのまま復原するという。ただ、それが要因となって、聖ザビエル天主堂は重要文化財にできなかったんです。文化庁は元の構造で復原しろというわけで、その意向と合わなかったんです。ザビエルは長崎の大浦天主堂（※注⑩）に次ぐぐらいの古い教会堂で、重要文化財にならないのはおかしいのですが。

でも実は、復原計画の段階でその覚悟



はできていました。だから、建物を残すか残さないかという判断の時はヨーロッパの考え方で、耐震的な安全性などは日本の考え方でいいと思います。

― 覚悟ですか。今のお話をうかがうととても重要な変更だったことが良く分かりました。

両方の建物を比較すると、同じ教会堂でも復元への経緯がまるで違うのが印象的で、特に現地での状態のことを慮ると、明治村へ来た当時の状況もリアルに想像できる気がします。

聖ザビエル天主堂の側廊に失われた彫像のことを紹介した銘板があります。でも、たとえ文字で情報が残されていても、そこにどんなものがあつたかは分からないんです。所有者の思いや明治村の思いがどうであろようと、とにかく建物を残さないと何も分からない。

開村の日のこと

― 構想の発表から4年で開村した明治村です

が、その背景を振り返ると驚くべき速さだったことがわかります。オープンした当日のことを教えていただけますか？

初日のことは今でもよく覚えています。

殺到した人々を見て単純に嬉しかったですし、感慨深かった。連日テレビや新聞も来て、反響も驚くほど大きかったです(※図12・図13)。

当日、私は伊藤三千雄さんと詰所について、その様子を二人で見っていました。谷口さんをはじめ建築委員会のメンバーもお客さんの多さに感激していたと聞いていますが、来客が多くて彼らとは接触できませんでした。

ただ、その一方では苦しい気分もありました。

― それはどうしてですか？

結局分からないところを残したまま復原したからです。それらについては細部まで全部把握しているの、オープンして良かったというよりも、やり残した気分の方が多かった。残念なことの方が記憶に残っ

ています。

それにね、産みの苦しみは相当ありました。それは他のメンバーも感じていたと思います。みんなでだいぶ苦労しましたから。

― 苦労が報われた瞬間はありましたか？

ないよ(笑)必ずしもいい仕事をしたからといって、報われるものじゃない。

これからの明治村へ

― 最後に、これからの明治村についてお話しただけですか？

それは難しいね。うーん…。

― 実は明治村の方々からも聞いて欲しいと言われていて、例えば、今後の明治村に期待したいことでもいいんですか？

…一般の人々がどう思うかということだと思っています。明治村ができる以前までは、一般の人々は明治の建築に関心がなかった。それが明治村ができてから、いつべんにお客さんが殺到するようになった。その影響

もあつて調査や研究も進み、また近代建築の保存や活用への意識も広がった。明治村は大変な役割を果たしました。

そういう意味では当初の目的は果たせたのです。やるだけのことはやりきった。

― 驚きました。普通は目的を果たせたとはいえませんが、確かなものではないですよ。確かに…いや、何とっていいのか。感激してしまって、言葉もありません。

ですから、これからはあなたたちが文化財を活用する場として、新しい役割を探さなくてはならない。

― 新しい役割ですか。…それは、まずは明治村を世界遺産にするとかどうでしょうか？それは悪くないね(笑)



図13 開村時のレンガ通りの様子。



図12 開村時の様子。メグテレの「あなたのマチの秘蔵映像」では開村式の映像が公開されている。